

## まえがき

当センターは 1973 年のノーベル物理学賞受賞者である江崎玲於奈 筑波大学学長（当時）の発案により、1994 年 5 月 20 日に筑波先端学際領域研究センター（Tsukuba Advanced Research Alliance Center ; TARA センター）として発足しました。その後、対象とする研究領域を自然科学全般から生命領域学際研究に特化した大規模な改組再編を 2010 年 10 月 1 日に行い、さらに 2018 年 4 月 1 日からは名称を生存ダイナミクス研究センターと改めました<sup>注1)</sup>。



## 細胞・個体・種が達成した動的生存戦略の解明

今回の改名の背景には、「ゲノム情報ビッグバン」といわれる近年の生命科学分野の大変革があります。ヒトを含む多くの生物のゲノム<sup>注2)</sup>が次々に解読されたことに端を発し、膨大なゲノム情報の発現調節機構と生命現象との関連性を研究する分野が急速に進展し始めました。私たちは生命現象の中で特に環境変動に動的に適応する細胞や個体や種の生存戦略とその多様性に焦点を当てた基礎研究を牽引し、社会が要請する「人類の調和のとれた持続的発展」に貢献します。

## 先端機器の共同利用も提供できる共同研究拠点形成

このような生物の動的生存戦略（生存ダイナミクス）とその多様性を解明するためには、次世代シーケンサー、質量分析、クライオ電顕、非破壊イメージングなどの先端機器を駆使し、膨大なゲノム関連情報と複雑な生命現象を的確に情報処理することが必須です。当センターは、これらを活用した共同利用・共同研究拠点を形成することで世界をリードする先端的基礎研究を推進します。さらに、大規模国際共同研究を実行できる組織体制への発展も目指しています。

## プロジェクト制を支える若手教員の任期制（最長 10 年）

当センター最大の特徴はプロジェクト制の運用です<sup>注3)</sup>。この制度の第一の魅力は国際的研究実績を挙げた研究者をプロジェクト教授として選考し、その研究を複数の任期制若手教員がサポートする点です。第二の魅力はプロジェクト教授の退職と同時にプロジェクトを解散し、その研究分野は継承せず（伝統に捉われず）、将来進展が期待される分野を新たに選定し直し新規プロジェクトを発足させる点で、これらにより常に世界トップレベルの研究成果を発信してきました。

ところが 2013 年の労働契約法の改正で若手教員の任期を 5 年以上延長できなくなり、当センターが採用してきたローリングテニュア制（審査で任期を更新できる任期制）も違法となつたため、これを廃止しテニュア制へ移行しました。しかしこの制度では審査に合格すればプロジェクト解散後も当該プロジェクトの若手教員の雇用を継続しなければなりません。このため当センターの魅力の一つであるプロジェクト解散後の完全なリニューアルが危惧される事態になりました。

そこで昨年7月から新任若手教員に対しテニュア制ではなく最大10年の任期制を適用することにしました<sup>注4)</sup>。任期を最大10年にできるのは、大学でのプロジェクト制には「科学技術・イノベーション創出の活性化に関する法律」による「労働契約法の特例」が適用されるからです。これにより若手教員から長期的なサポートが得られ、彼らにプロジェクトの期間に合わせた任期を付すことでプロジェクト教授の退職と同時にプロジェクトのリニューアルが可能になりました。

私たちは現在この任期制を学内プロジェクト<sup>注5)</sup>にも活用する案を検討中です。例えば系に所属し、生存ダイナミクス分野の研究をしている教員の中から将来性のある研究課題を申請した教員を選考し、当センターの助教ポストを3年間提供して共同研究を推進したいと考えています。

2020年8月



国立大学法人筑波大学  
生存ダイナミクス研究センター  
センター長 林 純一

## 脚注

注1) 当センターの略称はこれまで親しまれてきた「TARAセンター」を変更せずに使用しています。また、発足時に制定された当センターのロゴも変更しません。ちなみにこのロゴは、白（透明）が筑波大学の地図、茶色が大地、青が空（宇宙）を表しています。

注2) 核酸を素材とする生物の設計図。

注3) 「1. センター組織と構成員」の項参照：2019年度は丹波隆介教授が新しいプロジェクト（生理ダイナミクス）の教授として着任し、合計6プロジェクトでの編成になりました。現在さらに1つのプロジェクトを公募する計画です。

注4) この任期制は丹羽隆介教授の新しいプロジェクトを支える新規採用の助教(2020年度着任)に初めて適用されました。

注5) 学内プロジェクトとは、TARAセンター発足時に導入された制度で、一部のプロジェクト教授は当時の学系（現在の系に相当）に所属したままで、TARAセンターから研究費、研究スペースに加え任期付教員のポストが提供されました。その後、TARAセンターから生命領域学際研究センターへの改組再編に伴い学内プロジェクトは廃止になりましたが、現在全く新しい制度として復活させることを検討しています。